



Data

監督：スコット・マクギー、デヴィッド・シーゲル

脚本：ナンシー・ドイン、キャロル・カートライト

原作：ヘンリー・ジェイムズ

出演：ジュリアン・ムーア／アレキサンダー・スカースガルド／オナタ・アプリール／ジョアンナ・ヴァンダーハム／ステイーヴ・クーガン

👁️👁️ みどころ

夫婦の離婚に伴う、親権と養育費の処理。弁護士にとって、それは日常的な事件だが、そこにはさまざまなテーマが……。『キッズ・オールライト』（10年）も『アイ・アム・サム』（01年）もよかったが、6歳の女の子の目から、両親の動きとその再婚相手の動きを追っていくと……。

「血のつながり」は大切だが、ひょっとして人間にはそれ以上に大切なものが……。また、本作に氾濫する「愛してる」という言葉は万能ではないということ、をしっかり確認したい。



■この夫婦ゲンカは？この言い争いは？■

2人のママと2人の子どもによる4人家族の食事風景は珍しい。そんなシーンから始まった『キッズ・オールライト』（10年）は女性同士の同性婚をテーマとした映画で、夫婦の絆、母子の絆そして家族の絆を描いた心温まる名作だった（『シネマルーム26』27頁参照）。しかし、その制作スタッフが再び挑んだ本作の冒頭は、スザンナ（ジュリアン・ムーア）の子守歌によって6歳の女の子メイジー（オナタ・アプリール）がいったんは寝ついたものの、激しく言い争う夫婦ゲンカの声に悶々とする（？）シーンからスタートする。

母のスザンナは有名なロックシンガーで、この家族が住んでいるのは素晴らしい邸宅。しかし、夫のビール（ステイーヴ・クーガン）と激しく言い争っている様子を聞いていると、どうもこの家はビールのものではなく、スザンナのものらしい。ビールも結構いい男だし、ビジネスマンとして英国にもよく出張しているらしいが、スザンナはロックシンガーとしてアメリカ中を巡業する機会が多いから、一人娘メイジーの世話はいまのマーゴ

(ジョアンナ・ヴァンダーハム) が一手に引き受けているらしい。ところが、よくよく見ていると、マーゴとビールの2人はどこか怪しげな雰囲気だから、アレレ・・・。

スザンナの激高に触れて、ビールは家を追い出されたようだが、さてこの夫婦の離婚調停と子どもの親権と養育権を巡る争いは・・・？

■□■親権と養育権をめぐる争いは、熾烈！■□■

離婚に伴う慰謝料や財産分与をめぐる争いも大変だが、子どもの親権と養育権をめぐる争いも熾烈になる場合が多い。日本では、妻が親権と養育権をとり、夫が毎月養育費を支払うというケースが多いが、その場合でも月に一、二度の「面接交流権」が認められることが多い。私が交通事故の講演の際のネタとして、塩屋俊監督の『0 (ゼロ) からの風』(07年) (『シネマルーム15』214頁参照) と共にいつも使っている『帰らない日々』(07年) (『シネマルーム20』133頁参照) でも、離婚した夫が「面接交流権」を使って息子と一緒にレッドソックスのナイターを観に行くシーンが描かれていた。この年、レッドソックスは優勝争いをしていたから、試合が長引いても帰るわけにいなかったのは当然。弁護士をしている彼は「あまり杓子定規に裁判所の決定を解釈されても・・・」と思ったが、面接の時間が長引き「門限」に遅れそうになったため、帰路を急いだのも、ひょっとして交通事故の原因の一つ？

アメリカでの「面接交流権」をめぐる裁判所の決定はそれほど拘束力が強いらしい。本作でもスザンナはメイジーの親権・養育権はすべて自分のものだと主張して争ったが、依頼した弁護士が悪かったのか、自分の裁判所での態度が悪かったのかは知らないが、結論的にはビールの言い分が認められて「共同親権」となり、メイジーは2つの家を10日間ずつ行き来することに。それはそれで悪くはないが、さて、その実態は・・・？

『アイ・アム・サム』(01年) では、7歳の知能しか持っていない父親のサムが7歳を迎えた娘の親権者になることが妥当かどうかをめぐって展開された父娘の愛に涙した(『シネマルーム2』125頁参照)。ところが、スザンナのようなあまりにも身勝手な母親では、いくらメイジーに対する愛情があっても、裁判所はスザンナに親権と養育権を与えることができないのは当然。しかし、その後の展開を見ていると、当のスザンナ自身がその事をわかっていないようだから、事態はさらに「悪化」していくことに・・・。

■□■父親の再婚相手は？ああ、やっぱり・・・■□■

スザンナ役ジュリアン・ムーアは確かに名女優だが、やっぱり年は年。それに対して、メイドのマーゴ役を演ずるジョアンナ・ヴァンダーハムは年が若くかわい系の美女だから、同じ屋根の下で一緒に住んでいればビールの気持がこちらに惹かれていったのは、ある意味当然・・・？おもしろいのは、離婚が決まり、ビールの家での10日間の新体験が始まる時のメイジーの反応だ。

スザンナと離婚したビールが今住んでいるのは大邸宅ではなく、普通のマンション。しかし、なぜそこにマーゴがいるの？女の子は男の子より早熟だから、メイジーはマーゴの姿を見てすぐに事態を理解できたのかもしれないが、マーゴとしては何か説明しないわけ

にはいかない。そこでマーゴが語った言葉は「パパのそばにいる人が必要だから私がやることにしたの」というものだが、それって猪瀬直樹東京都知事が徳州会グループから受け取った現金5000万円について、何やかんやと言い逃れをしていたのと同じように、かなり苦しい弁明は・・・。

もともと、メイジーはスザンナの家にいる時からメイドのマーゴが大好きで気が合っていたから、メイジーにとっても父親のビールがマーゴと再婚するのは大歓迎。その結果、メイジーは結婚式で花嫁付添人の大役まで務めることになったが・・・。

■□■何とこっちも！しかし、その実態は？■□■

ビールの家での10日間が終わり、今日は再びスザンナの邸宅に戻る日。ところが、なぜか学校に迎えに来たのはスザンナではなく、背の高い若い男だ。そして、校長から「どなた？」と聞かれると、この男は「継父です」と答えたから、メイジーとマーゴはびっくり。そういえば、この男は数週間前にスザンナの家遊びに来ていたが、彼はスザンナの音楽仲間の一人ではなかったの・・・？

リンカーンと名乗るこの男（アレキサンダー・スカルスガルド）はバーテンダーとして働いているそうだが、スザンナがメイジーに言う「あなたのために結婚したのよ」とは一体どういう意味？映画冒頭からスザンナの自信満々さと身勝手さが際立っていたが、この時点でこんな言葉を聞くと、そのココロは、自分がロックシンガーとして忙しく飛び回っている間に夜はバーテンダーとして働き、昼間はメイジーの面倒を見てくれる「便利な」夫という意味にしか理解できない。しかし、意外に優しく子どもの扱いにも慣れているリンカーンにメイジーはすぐに馴れて、学校では「私の新しいパパよ」と紹介するまでになったから万々歳だ。そう思っていると、ここで「娘に取り入るなんて、あきれたわ」とスザンナがいらざる嫉妬を始めたから、大変だ。やれやれ、このわがまま女のここまでのわがままぶりには、いい加減うんざり・・・。

■□■誰の目線で？それが最も大切！■□■

男女の世界には当然愛が絡んでくるので複雑。また、大人の世界は仕事や金、立場や地位等々の利害が絡んで複雑だ。しかし、子供の世界は単純だし、その目線も単純。そう思うのが普通。そして、本作に描かれる大人の世界はたしかに複雑で大変だが、メイジーの目線そのものも複雑で大変だ。つまり、6歳の女の子にとって両親の離婚だけでも大事件だから、それを受け入れるのに大変な努力を要するはずだが、「共同親権」とされたため、10日ごとに母親宅での生活と父親宅での生活を余儀なくされたうえ、その2人ともが「再婚」してしまうのだから、その激変する環境を見つめるメイジーの目線は難しい。そのうえ、本作後半は、父親からも母親からも「愛しているよ」という言葉だけはいっぱいかけられながら、その実体は放置もしくは遺棄に近い状態に置かれるメイジーの姿が描かれているから、さらに大変だ。

6歳くらいの活発で頭のいい女の子なら、大体は口が達者でおしゃまなタイプが多いが、メイジーは決してそうではなく、口数は極端に少なく、次々と訪れてくる環境の変化を黙

って受け入れる姿が目につく。唯一メイジーが6歳の女の子らしい不安と恐怖を口に出し、涙を流しながら「お家に帰りたい！」と訴えるのは、さまざまな偶然のめぐりあわせの中で、見知らぬ女性の家のベッドの中で目を覚ました時からいだ。スザンナとビールとの2人を軸として、多くの大人たちがそれぞれ勝手に自分たちの都合だけで状況を変えていること

が、本作のようにメイジーの目線で見えていくと実によくわかる。近時、ブレる？それともブレない？によってコトの善悪を決める風潮が強いが、その前提としては、誰の目線で物事を見るのが大切！本作におけるメイジーの目線を見ていると、それを痛感するはずだ。



© 2013 MAISIE KNEW, LLC. ALL Rights Reserved.

■□■草食系男子にもこんな男の強さが！■□■

スザンナの家でメイドをしていたマーゴがいつの間にかスザンナの夫のビールとデキていたこと、そして夫婦の離婚に伴ってマーゴがビールの後妻に納まった(?)ことは世の実態としてよくあること。したがって、そこにマーゴの「強い意思」を感じることはできず、マーゴは変化する状況を確認しながらその中から訪れてくる「結果」を受け入れているだけという感じが強い。それに対して、リンカーンが離婚したスザンナの「若いつばめ」としてではなく、スザンナの再婚相手となったのは、そこにリンカーンの強い意思が働いているはずだ。

残念ながら、リンカーンがスザンナとの再婚を決意するに至るまでの気持ちは本作には描かれていないが、リンカーンがごく自然にメイジーの若い新しい父親になっていく姿を見ていると、この男はもともと草食系？そう思えてくる。なるほど、ド派手でチョーわがまま、そしてあくまで自己チューだが経済力は持っているスザンナが好きになるのは、ビールのような男らしいビジネスマン(?)ではなく、リンカーンのような女に尽くすこと、子供に尽くすことを全然嫌とは思わない草食系男子・・・？私はそう思いながら本作後半の展開を観ていたが、ツアーに行っているはずの、しかも男連れのスザンナからマーゴと一緒にいることをリンカーンが一時的にしがめられると、リンカーンは逆に「それでも母親か！」と反撃。ここで見せたリンカーンの怒りの激しさとその後の行動力を見ていると、なかなかどうして、一見草食系にみえるリンカーンにもこんな男の強さが！最近の邦画に

登場するカッコいい日本の若者たちは概ね草食系男子が多い。それはそれで仕方ないのかもしれないが、そのどこかにこのリンカーンのような男としての強さを秘めていて欲しいものだ。

■□血のつながりがそんなに大切？それとも・・・？■□

ビールは英国出張が多いようだが、それってホントにビジネスのため？そこらがよくわからないうえ、最近はいほとんど家に寄り付かなくなっているビールの様子にマーゴが不安を感じたのは当然。ひょっとして自分はメイジーの面倒をみるメード役となるために、ビールと再婚したのでは・・・？

離婚とそれに伴う親権・養育権という本作のテーマは、あくまで「血のつながり」を前提とした法律問題だが、裁判所の命じた「共同親権」の実体が何もないことが明らかになっていく本作中盤以降は、「血のつながり」に代わる「何か」が大きなテーマになってくる。スザンナとビールは既に離婚し別居したのだから、スザンナやビールと再婚したリンカーンとマーゴが顔を合せたり親しく話をする機会は本来ありえない。したがって、そんな2人が偶然出会うチャンスがいくつも訪れてくる本作のストーリーは若干恣意的だが、その設定がうまくいくからそれなりに説得力がある。リンカーンがマーゴの家をはじめ訪れたのは、スザンナもビールもいない中でメイジーと楽しい休日を過ごしていたリンカーンに急遽仕事が入ったためだ。誰かメイジーの面倒をみてくれる人を捜さざるをえなかったリンカーンは仕方なくマーゴの部屋を訪れたわけだが、そこである事情によって取り乱し、泣き崩れているマーゴをみると・・・。

リンカーンにとってはスザンナの、そしてマーゴにとってはビールのそれぞれあまりに身勝手な行動はいくら「血のつながり」を強調してもリンカーンやマーゴには認められるものではない。そしてそれは、スザンナとビールの唯一人血のつながった一人娘であるメイジーにとっても同じなのでは・・・？さらに6歳の女の子のメイジーにとって、血のつながりはなくとも現実に自分を可愛がり、手をつないで遊んでくれるリンカーンやマーゴの方が、より父親や母親にふさわしいのでは・・・？そんな流れの中、本作ラストではメイジーは究極の選択を迫られることに・・・。

海辺の空き家でリンカーン、マーゴと共に夏休みを楽しく過ごしていたメイジーの元を大きなツアーバスで訪れたスザンナは、当然のようにメイジーをバスの中に招いたが、さてそれに対してメイジーはいかなる対応を？血のつながりはもちろん大切だが、その大切さはどこまで？考えさせられることの多い本作のそんなラストを、じっくりと味わいたい。

2013（平成25）年12月25日記